

『物類称呼』の地名表示について

小野, 望
筑紫女学園短期大学助教授

<https://doi.org/10.15017/10427>

出版情報 : 文献探究. 20, pp.46-51, 1987-09-26. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

『物類称呼』の地名表示について

小野 望

本稿は、越谷吾山『物類称呼』の俚言の使用地域として示された地名に注目し、俚言の地域別（地名別）・分野別の偏り及び地名の表示方法という点から、本書の性格の一面を考察するものである。

1. 1

『物類称呼』において俚言の使用地域として示されている地名は、約二百に及ぶ。まず、これによって全国を九地域に分け、語数の比率を示しておく。（九地域名は現行のものによる。二以上の地域にわたる地名「東国・西国」はそのまま表示する）

東国	5.3 %	
東北	7.6	
北陸	7.5	
関東	23.8	53.9
中部	3.1	
東海	6.6	
関西	19.8	
中国	7.1	
四国	5.4	46.1
九州	9.3	
西国	4.5	

関東に次いで関西があがるのを除けば、他はほぼ同等で、必ずしも「江戸」に近い順というわけではない。

『物類称呼』の俚言採集方法は明記されていないが、臨地調査に

よるものではなく、通信や出身者などによる情報・先行文献の記事によったのであろうと言われている。結局上記の比率は、情報の集まり易さの現れということになるのだろうが、吾山の執筆（採集）の意図も反映していると考えられる。

序文に

大凡我朝六十餘州のうちにも、山城と近江又美濃と尾張、これらの国を境ひて、西のかたつくしの果まで人みな直音にして平聲おほし。北は越後信濃、東にいたりては常陸をよひ奥羽の国々、すへて拗音にして上声多きは、是風土水気のしからしむるなれば、あなかちに褒貶すべきにも非ず。畿内にも俗語あれば、東国の邊国にも雅言ありて是非しがたし。

巻四「梯」の条に

今按に、東海道五三次の内に、桑名の涉より言語音聲格別に改かはるよし也。

のような記述がある。内容そのものは目新しいものではないが、吾山が東西の方言対立を意識し、執筆に際してその対比をある程度意図していた可能性をうかがわせる。①上記の表に見るように、東西に分けた場合、語数がほぼ対等になること、②全項目のうち二語以上の俚言をあげるものが七割、その八割が東西両地方にわたって記述すること等も、この意図によるのではないだろうか。また、東西の境界地帯の越後・加賀、信濃・近江、尾張・伊勢の諸国の俚言が比較的多いのも、やはり同様の意識による採集の結果と考えること

ができる。

また、序文に

都会の人物は：：却て上古の遺風を忘るるにひとしく、邊鄙の

人は：：まことに古代の遺言をうしなはず。

と述べているような対比は、例えば①九州の比率が関東・関西に次ぐこと、②後に述べるように、国別に見て（遠隔の地である）土佐・薩摩の語が多く採られていること等として現れているのではないだろうか。

1・2

次に考察の手順として、地名をその表示方法（主として範囲の広さという面）から、次の四種に分類しておく。

I、数力国を含む大地域による表示：：全体の約28.7%

東国

奥羽、奥州、東奥、陸奥、出羽

北国、北陸道、越路

関東、坂東

東海道

関西、上方、畿内

中国、山陰道、山陽道

四国

九州、九国、筑紫

西国、西土、西海

これらについては、東国・西国等、奥州等・陸奥・筑紫の範囲が問題となる。

II 国名による表示：：全体の約46.9%

上位は次の国々である。（語数順、全体に占める割合を%で示す）

上総 3.8、土佐 2.5、尾張 2.3、伊勢 2.2、加賀 1.9、武蔵 1.8

越後 1.4、薩摩 1.3、遠江 1.2、信濃 1.7、下総 1.6、上野 1.2

常陸 1.4、近江 1.3、駿河 1.3、越前 1.2

III、江戸・京都・大阪：：全体の約12.6%

それぞれ全体の7.0%、4.2%、1.8%。この三都については、吾山の本拠地としての江戸と、それに対比される西の都として多く採られたものである。

IV、藩名、或はより狭い範囲の表示：：全体の約11.8%

十語以上あげられているものを語数順に列記する。

仙台、津軽、南部、長崎、唐津、伊勢白子、堺、佐賀

これらの中には、「仙台、津軽、南部」のように、おそらくは藩名で範囲もかなり広いもの、「伊勢白子」のような宿場町の単位などレベルの違いがあるものと思われる。

右の四種は重なることもあって、I+IV（奥州津軽、奥の南部）、

II+IV（越後高田、武州隅田川）、III+IV（江戸隅田川、京嵐山）、

IV+IV（長崎丸山）の場合がある。また、ある語に複数の地名が併記される場合各所にわたっており、範囲の大小による制約は認められない。

2

以下、1に表示した九つの地域毎に、注目すべき点を考察する。

2・1「東北」

「陸奥」について。この語には「陸奥・陸中・陸前・磐城・岩代」の五カ国を示す場合・十羽前の六カ国を示す場合と、国名としての陸奥（青森県十岩手県二戸）を示す場合とがある。これについては、①「陸奥」を冠して南部・仙台が一例ずつながらあること、②「陸奥国」の領域は津軽・南部の藩名で相当数の語があげられていること、③東北地方ではこれ以外に国名による表示がないことの三点から、次の「奥州」と同じく大地域を示したものと考えられる。

「奥州」の語について。この語はもともと「陸奥国」の称である。①「奥州・奥の」という大地域を冠して、松前・津軽・南部・三戸・仙台・会津・二本松・白河があり、「出羽・羽州」を冠して秋田・最上があること、②「奥羽」の称が少ないながらあることの二点は、上記五カ国を「奥州」、羽前・羽後を「出羽」として東北地方を二分していることを示すように見える。

ただし、①「東奥」の言い方が三例ながらあること、②「奥州より越後邊」という併記の例が若干あって、これは出羽の地域をも含んでいるように思われることの二点を考えると、「奥州」の語で奥羽地方全体を表す場合もあるようだ。従って、東北地方については、一応「奥州」（東）―「出羽」（西）で表し、よりゆるやかに、全体を「奥州」で表したものと考えられる。

東北全体で見ると、Iが31%、残りがIVということになる。IVのほとんどが藩名を表すと思われるが、東北では（「陸奥」がIであるとする）IIがなく、I+IV、またはIVのみという形で表示が行われる。（他地域ではIがII以下の地名に冠されることはない。また、IVが単独で現れる場合も少ない。）このパターンに、東北の地名表示の特色がある。

2・2「北陸」

越後・加賀・越前が多くあげられるが、これは前述の通り東西対立を意識した結果と考えられる。

Iとして「北国・北陸道・越路」が考えられるが、これが北陸全体の10%で、他の地域に比べてIの割合が少ない。これも地域内に東西の境界を含むことの当然の結果かもしれない。

2・3「関東」

全国にわたり、IⅡⅢⅣの全てを同列に比較して上位二十位までのものを示すと、次のようになる。

江戸、東国、西国、京都、畿内、上総、土佐、尾張、四国、伊勢、関西、中国、加賀、武蔵、越後、薩摩、大阪、遠江、関東、信濃

お膝元であり、吾山の本拠地である「江戸」の語が最も多くあげられているわけである。関東地方全体の29%を占めている。

前記のごとく、「上総」が国名として非常に多いのが目立つ。特別の情報源を持っていたものと考えられるが、詳細は不明である。

Iとして「関東・坂東」があるが、関東全体の7%に過ぎない。これは身近な地域としての情報の豊富さということによるものであろうが、後に述べる「東国」が広く東日本を示すものながら、主として関東を中心とした語を含んでいることも関係がある。

「関東」については今の関東より広く東日本一帯を表す用法もあったが、「物類称呼」においては、ある語に複数の地名が併記される場合の組合せに「関東+東北・北陸」のものがかなりあって、「関東+東日本全域」という意識ではないようである。ただし、「関東+東国」、また「関東+中部・東海」の併記例はない。

「下野」国内のIVに「佐野・栃木・鹿沼・宇都宮・日光」があげ

られているが、総て日光道中（又は日光例幣使道）の宿場である。

2・4 「東海・中部」

信濃・尾張で、この地域の半数近くにのぼる。前述のごとく、序文にも記された東西対立の地域としての意味があるのだろう。信濃の西隣の飛驒・美濃が少ないのは、中山道から外れていることによる情報量の少なさのためと思われる。（美濃で唯一のIVである「加納」は、中山道の宿場である。）そうだとすると、甲斐が少ないのも同じ理由によるものであろう。

Iは非常に少なく、「東海道」が僅かにあるだけである。この理由は、中部地方については、もともと全体数が少ないこと、この地域を呼ぶ習慣的な名称がなかったこと、「東国」との関係などが考えられる。東海地方については、情報が豊富だったのではないかと考えられること、北陸と同様に東西の境界地帯であることが考えられる。

2・5 「関西」

川京・大阪で関西全体の30%にのぼる。

国別に見ると、「伊勢」の多いのが目立つが、これも前述の東西対立との関係があるものと思われる。また、「伊勢」国内のIVとして「長島・白子・久居・松阪・山田・鳥羽」があげられているが、山田までは伊勢路の宿場であり、鳥羽は江戸・大阪間航路の重要な港である。

Iとして「畿内・関西・上方」がある。畿内五カ国については、II国名によるものが少なく、まとめてIという意識のようである。「関西」については関東と同様、今言うのよりも広く西日本一帯を表す用法もあった。「物類称呼」における併記の状況を見ると、

「関西十近江」一例、「関西十畿内」二例があり、他に「関西十四国・九州・西国」の組合せがある。「十近江」は東山道に属する東西接境地域であること、「十畿内」はその近江と伊勢を加えるものと考えれば、現在の用法と同じであると考えてもよいであろう。特に「十西国」の例があることは、これを支持する。ただし、中国との併記例はない。

2・6 「中国」

II国名によるものが、中国地方全体の三分の二にのぼるが、国の数が多く（十五國中備中を除く十四国があげられている）、語数は分散している。中では出雲・播磨・備前に偏り、この三国で中国地方全体の四割弱にのぼる。

Iとして「中国・山陰道・山陽道」があるが、「中国」がほとんどである。

2・7 「四国」

I「四国」とII「土佐」で、四国全体の九割弱にのぼる。「土佐」については、巻四「湯罐」の条に、次の記述が見える。

土州の客、予に語ていはく、我故郷にやつくわんと云有。ちやびんと云物よりは少大きくして口短を云。ちやびんと云は、形丸らかにして口長きを云とぞ。
（注）

実際に情報提供者があったことが知られる。

2・8 「九州」

Iとして「九州・九国・筑紫」があげられる。「筑紫」をここにいたしたのは、前にも引用した序文に

これらの国を填ひて西のかたつくしの果まで人みな直音にして

と見え、この「つくし」が明らかに九州を表していることによる。しかし、そうだとすると「九州」と「筑紫」はほぼ同数にのぼるのだが、これらの関係が問題となる。九州以外の地域においては、各地域のIは大体一種類であるか、または範囲のやや違うものになっていた。すなわち、関東—坂東(一例)、関西—畿内—上方(三例)、北国—北陸道(約半数)、中国—山陰道—山陽道(各二例)のようである。複数の大地域が相当の語数を持つ併存するのは、奥州—陸奥(略称の関係)、関西—畿内(範囲に差があると思われる)のみであった。これらから考えると、九州II筑紫とは考えられないようだ。

九州内を国別に見ると、薩摩一國が九州全体の三割弱を占め、IVにも多くをあげる肥前を除いて他の国々の語数は少ない。あるいは、南の薩摩に対し(漠然と)北の筑紫という意識があったのかもしれない。

IVのほとんどが肥前である。「長崎・唐津・佐賀」が多い。他に「鍋島、平戸、島原」がある。これらはすべて藩を表す語のようである。同じく藩名のIVが多い東北においては、その前にIを冠する(ことが多い)のと違って、前にII国名を冠する場合が多い。

2.9

以上をまとめると、

- ① I大地域の表示方は、各地域毎に大体一種類がある。例外として、東北(○奥州・陸奥・出羽)、関西(○関西・畿内)、九州(○九州・筑紫)がある。これらは、地域全体を表す地名(○)とその内部のやや狭い範囲を表すものに分けることができる。
- ② Iは、東北を除いてII以下と共に用いることがない。
- ③ 関西・関東で全体の四割強にのぼり、III江戸・京都・大阪の三都

で全体の約13%を占める。④ II国名による表示が全体で最も多いが、特に「北陸・中部・東海」においてその比率が高い。それ以外は、関東が(江戸を含む関係で)IVが多く、「四国、関西、中国、東北、九州」はIの比率が高い。遠国がI、関東・北陸・中部・東海がIIという傾向である。⑤ 国別に見ると、「上総」が非常に多く、他に東西の境界地帯の国々、土佐・薩摩・肥前が目立つ。⑥ IVの多いのは、東北・関東の他、越後・信濃・伊勢・山城・肥前である。後者は⑤と関係する。

3 「東国・西国」

一応2の分類ではIに入れたが、東日本—西日本を表すと思われる「東国・西国」の語がある。

ある語に複数の地名が併記される場合の組合せを表示する。

	東国	北陸	東海	西国	中国	四国	九州	西国
東国	○							
北陸		○						
東海			○					
西国				○				
中国					○			
四国						○		
九州							○	
西国								○

この表で見るように「東国」は東日本の国々とは併記されない。「西国」は中国・四国とだけ併記の例がある。

「東国」については、大体東国＝東日本と考えてよいようである。ただ、「東国」とされた俚言について、現在の分布を見ると、東日本全域に分布するものもあるが、関東・中部・東海を中心として分布しているものが多い。「東国」という記載について、吾山の情報の中心となったのはこれらの地域ではないかと考えられる。

「西国」については、中国・四国との併記から見ると、西日本のうち九州を示しているように見えるが、やはり中国以西の西日本を表したものと考えられる。①「西国」の俚言の現在の分布を見ると、広く西日本全域にわたる場合がかなりあること。②それらが併記の例として、例えば「播磨より西国」「関西・西国」「畿内・四国・西国」などのように現れていること。これらの点から、「西国」という語については、かなりゆるやかな基準で使われているものと考えられることができる。

4
全体をまとめて、「物類称呼」における俚言には、「江戸・京都・大阪」を中心とする関東―関西の対比、これを含む東日本―西日本の対比、それに付随して両者の境界地帯の俚言を示すという方向と、遠隔地の俚言を示す方向とが認められる。

注

土佐・長崎・薩摩については、卷一人倫・卷四衣服器財・卷五言語の語彙が多い。(特に卷五が注目される。)『物類称呼』の語彙については本草学との関係が言われているが、これは主として卷二・三についてのはずである。上記の三地において、人間生活に関する語が多いことは、大きな特色と言ってよい。書物による情報と考えるよりも、対話を通して得たものが多かったのではないかと考えることができる。

— 筑紫女学園短期大学助教授 —